別紙２

論文審査結果の要旨

論文提出者氏名　趙寛子

本論文（「反」帝国主義の文化と歴史――戦間期の帝国日本と植民地朝鮮の言説空間）は、第一次・第二次世界大戦間に、帝国日本と植民地朝鮮との狭間で活動した朝鮮知識人が複雑な政治的力学のもとで見出した言説の性質を、当時の思想家・社会活動家たちとその作品を素材に、多角的に分析したものである。

第一部、第１章では申采浩の暴力批判論、第２章では親日派となった李光洙を論じる。両者について、従来の研究は多くの場合、親日を批判し反日を評価する位置づけを前提としていたが、これに対して、趙氏は、この視点が韓・日両ナショナリズムをめぐる鏡像的な裏返しの関係になっていることを指摘、これを脱却する地平を探求している。申采浩について、その暴力批判が一種終末論的な様相をも帯びた「滅罪的な暴力」論であることを指摘し、また李光洙については、それが「親日ナショナリズム」というべき微妙で両義的な努力であったことを見事に描いている。

第二部、第３章・朝鮮学と古典復興の章では学術界、第４章・国民文学と世界文学では文学界を論じる。ここでは、朝鮮文化を掘り起こし学術を確立しようとする志向がしかも帝国の路線と絡み合っていること、歴史や民俗をめぐるロマン主義が日本のそれと共鳴する面があったことを述べる。また同時に、日本語の世界もまた、自己植民地化していたこと、これらに働く暴力を批判的な視線で見逃さなかった論者もあったことを指摘、複眼的で奥行きのある射程が示されている。

第三部、第５章は、東亜協同体論が、朝鮮・中国で映った像やその全体としての働きを分析し、日本の中国満州への侵略に相応じながら植民地・朝鮮の生活世界やその欲望が拡大するが、それをじつは「力の政治」が覆っていたことを指摘する。第６章では、以上を見据えた思想家として徐寅植を論ずる。西田哲学琉の多中心の思想が、救済史的なビジョンのうちで日本中心化し暴力や戦争を容認するものにな

るのに対して、徐は、他者を前提にして個性的な「私の運命」とその不在を語ることで、かえって暴力に寄り添ってしまう欲望への回収を拒否し、根源的な生の共同性への責任を明らかにしている、とする。本章の議論は、平明でなく、叙述に不十分さが見られるが、委員の間に共鳴を呼び起こすところが多かった。

以上のような議論を通じて、趙氏は、力の政治における「対抗的共犯関係」を越えるものとして、人種・民族・国家に固着することなくその境界を生きる「生活者」の視点を提起し、そこから暴力に回収されることなく世界的な交流と共存が開かれる道を構想する。このライトモチーフも、魅力的なものとして評価された。

他方、議論の流れが時として修辞に流れ晦渋となったり、問題意識が前面に出すぎて論証に飛躍があるなどの問題点が指摘された。また、暴力批判の問題意識は、理解できるものの、やはり批判にとどまっており、暴力を制御する歴史的・社会的次元に踏み込んでいない点にも問題がある。ただし、この点は、扱った時期と知識人のおかれた状況とも関連しており、またそれが翻って現代に示唆を与える点もある。

以上のように、本論文は、戦間期の朝鮮・日本という特定の地域文化の狭間に踏み込んだ思想史研究であると共に、そこから平和構築に結び付く普遍的な思想を発見しようとした営みでもあり、その鋭敏な研究は高く評価できる。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認める。

別　紙　３

最終試験の結果の要旨

本審査委員会は、平成１５年１２月２４日に論文提出者に対し、学位請求論文の内容および専攻分野に関する学識について口頭による試験を行った。

その結果、論文提出者は博士（学術）の学位を受けるにふさわしい十分な学識を有するものと認め、審査委員全員により合格とした。